

第3章 将来像と目標

1. 将来像

1960年代以前の所沢市は、狭山丘陵の谷戸*や柳瀬川、東川沿いなどの低地に水田が連なり、アニメーション映画「となりのトトロ」の舞台のような風景が広がっていました。台地上には、農用林*として植えて手入れされた平地林*と畑が一体となり、尾根部にはアカマツが立ち並んでいる武蔵野の風景がつくられていました。

その後、まちの発展に伴う団地開発や宅地開発などによって約20年の間に急速に自然は減り、とりわけ水田、湿地は狭山丘陵の谷の一部に残るのみとなりました。郊外の平地林も面積が小さくなり、つながりも分断されて、生態系*の上位に位置するオオタカやホンドキツネなどは特に生息しにくくなっています。また、森に管理の手が入らなくなったことから、キンランやギンランなどの明るい雑木林*に生育する植物が少なくなっています。

一方、急速な自然の減少による危機感の高まりから、30年ほど前に、市民団体によるナショナルトラスト活動*が始められ、また、行政による樹林や水辺の保全が進められてきました。まちなかでは樹林や農地が大きく減少しましたが、大規模な団地や米軍基地の返還跡地の公共公益施設*、公園、道路などに植えられた樹木が大きく育ち、みどり豊かなまちなみが広がっています。

2019年（令和元年）に実施した市民アンケートでは、「住まいの近くの自然」については97%の人が、また、「身近な生きもの」については96%の人が「増えてほしい」又は「現在の状態を維持してほしい」と回答しており、多くの人が、身近に自然や生きものとふれあえるまちづくりを望んでいます。

私たちの暮らしは、生きもののにぎわう豊かな自然から、さまざまな「自然の恵み」を受けて成り立っています。生きるために不可欠な水や酸素のほか、食料、繊維、木材などの原料などを得て豊かな衣食住を成り立たせています。子どもたちは自然の中での活動を通じて、体力や思いやりの心など心身の健全な成長を育むといわれています。また、植物の蒸散作用*によって空気を冷やして夏の暑さを緩和したり、雨が地面に浸透・貯留されることによって洪水を抑えるなど、安全、安心で快適な暮らしにも「自然の恵み」は欠かせません。ほかに、自然は市の地域振興にも深くかかわります。都心から1時間圏内にあ



大谷田んぼ（現在の松が丘付近）
（1975年（昭和50年）頃）



新所沢駅周辺（1960年（昭和35年）頃）



守られた自然（狭山丘陵）



みどり豊かなまち
（市役所屋上からの風景）

りながらも、自然が豊かで、多くの生きものとふれあうことができる環境を活かした、本市ならではのまちづくりが期待されます。

自然や生きものの大切さが認識されるなか、本戦略の上位関連計画である、「第6次所沢市総合計画」や「所沢市マチごとエコタウン推進計画（第3期所沢市環境基本計画）」「所沢市みどりの基本計画」には「人と自然が調和したまちづくり」「人と自然の共生」「人と自然の絆」という、人と自然が共にあるまちを目指す目標と、その実現にむけてエコロジカルネットワークをつくる方針が示されています。

「第6次所沢市総合計画」の将来都市像である「元気あふれる『よきふるさと所沢』」を実現するためには、大人が心豊かに暮らせるふるさとを子どもたちに引き継いでいき、本市に誇りや愛着を感じ、いつまでもたっても懐かしいと思えるまちにすることが大切です。また、本市に魅力を感じる人に移り住んでもらったり、週末に訪れてもらうことも望まれます。長い年月をかけて育まれた「自然」や「生物多様性」は、市の個性、市民共有の財産であり、まちへの誇りや愛着を育み、地域が発展する源にもなるものです。

これら、市の自然状況や、将来にわたって受け続けたい「自然の恵み」、上位関連計画との整合をふまえ、本戦略によって実現するまちの将来像を次の通り設定します。



子どもが自然とふれあえるまちに



自然を楽しみに多くの人が訪れるまちに

将 来 像

身近に「生きもののにぎわい」を感じ 心豊かに暮らす善きふるさと所沢

■身近に「生きもののにぎわい」を感じ■

まちなかでも野鳥のさえずりや虫の声が聞こえ、子どもたちが家や公園、学校のまわりでチョウやトンボ、カブトムシなどに触れ合うことができます

■心豊かに暮らす■

「生きもののにぎわい」を本市に暮らす誇りや愛着、安全・安心、快適なまちづくりにつなげます

■善きふるさと所沢■

人と生きものが織りなす善きふるさと所沢を育みます

将来像

身近に「生きもののにぎわい」を感じ 心豊かに暮らす善きふるさと所沢



自然や生きものを守るさまざまな活動が行われています



自然や生きものが好きな子どもがたくさんいます



キュウシュウノウサギ



ツグミ



シジュウカラ



エンマコオロギ



ヒヨドリ



コゲラ



自然を楽しみに多くの人が訪れています



ホンドキツネ



ホンDOIタチ



ミナミメダカ



カブトムシ
ノコギリクワガタ



ベランダや庭にも生きものがやっています



クロアゲハ



カタクリ



オオムラサキ



ジャノメチョウ



カワラビロ



ジョウビタキ



カナヘビ



カルガモ



ギンヤンマ



ヤマトタマムシ



ウグイス



絶滅の恐れがある生きものを守り、増やす活動が行われています



2. 目標

将来像の実現に向けて、次の4つの目標を設定します。

目標1

「生物生息空間」を守り、創り、つなぎ、 エコロジカルネットワークをつくります

野生の生きものの多くは、生まれてから1か所にとどまっているのではなく、繁殖や採食などのために「日」「年」「一生」などの単位で、生息空間を移動して暮らしています。そのため、生きものが長くその地域で生息生育できるようにするためには、さまざまなタイプの「生物生息空間」が連なり、その間を生きものが移動できるようになっていることが望まれます。

このことは、本市を『身近に「生きもののにぎわい」を感じるまち』にするために重要です。まちなかの公園や集合住宅地、河川などに、樹林や草地、水辺などの「生物生息空間」があり、郊外からまちなかまで「生物生息空間」のつながりが確保されることによって、身近に生きものとふれあえるようになるためです。

本市の「生きもののにぎわい」を保全するために、郊外からまちなかまでさまざまな場所で「生物生息空間」を守り、創り、つなぎ、エコロジカルネットワークをつくり維持することを、基本的な方策として取り組みます。

目標2

身近な自然や生きものへの 「親しみ」と「関心」を高めます

生物多様性を守る取り組みを広げていくための第一歩は、自然や生きものに「親しみ」と「関心」を持つことです。そのための方法として「知る・学ぶ」「体験する」ことが重要です。

2019年（令和元年）に実施した小学校5年生を対象にしたアンケートで、「所沢市内で経験したことのある自然体験」の回答として最も多かったのは「虫とり」でした。4人に3人が経験したことがありましたが、見方を変えれば4人に1人は虫とりを経験したことがないということでもあります。子ども時代にチョウやバッタ、トンボなどの身近な生きものを捕まえたり、観察することは、自然や生きものへの「親しみ」と「関心」を育むために大切な経験です。

そこで、子どもたちが自然や生きものを「知る・学ぶ」「体験する」機会を増やすとともに、親や学校の先生などにも身近な自然や生きものへの「親しみ」と「関心」を持ってもらうための取り組みを進めます。

また、世代にかかわらず、多くの人の自然や生きものへの「親しみ」と「関心」を高めるために、自然や生きものに関する情報発信の充実を図るほか、講習会や自然体験イベント、自然観察会など、参加機会の充実に取り組みます。

目標3

「生きもののにぎわい」を
守るために行動する人や団体等を増やします

本市では、全国的に知られる市民団体のほか、「みどりのパートナー」や「水辺のサポーター」制度にもとづき、樹林や水辺の管理をボランティアで行う団体の活動が盛んです。企業も土地所有者として自然の保全活動に参画し、狭山丘陵では大学がキャンパス内で自然の調査や保全を行っています。ほかにも団体等の支援を受けて、学校や企業の自然体験活動などが行われています。加えて市内には、環境美化や緑化、農業体験などの活動を行っているさまざまな団体があります。

「生きもののにぎわい」を守るために行動する団体等を増やすためには、いま活動をしている団体等の活動に「生物多様性の保全」への取り組みを加えてもらうことが有効と考えられることから、取り組みを進めるための専門家によるアドバイスや、優れた取り組みの広報などを行います。

また、市内には、生物多様性についての深い知識と活動経験を持つ団体があることから、これらの団体と行政が連携をして、市民や学校、企業などによる生物多様性の保全活動を促すしくみづくりを進めます。

さらに、生物多様性を守るためには、地球温暖化*の抑制を含む、地球全体の生物多様性に配慮した消費活動や、農業や商工業などの産業分野での活動も重要であることから、これらに関わる人や団体等の取り組みを後押ししていきます。

目標4

「自然の恵み」を
所沢市の魅力アップにつなげます

将来にわたってまちの活力を維持していくためには、心の豊かさやまちへの愛着を持ちながら本市に「住み続けたい」と願う人、本市に「訪れたい」「住んでみたい」と考える人を増やすことが望まれます。

「自然」は、本市の気候や地形などを基盤に、落ち葉を堆肥とする農業や谷戸*の水田耕作などの人の営みの影響を受けながら、長い年月をかけて育まれてきたものであり、祭りや食文化などの地域文化の源にもなっています。まちの個性である自然や文化はまちの大きな魅力であり、住民の心の豊かさやまちへの愛着を高めるものです。

また、「自然」には、洪水などの災害や、夏の暑さの緩和などの機能があり、安全・安心や快適性を高めることによって、まちの魅力向上に役立つほか、地域の魅力としてまちの活力向上にも役立ちます。

これら「自然の恵み」を将来にわたって、大きく得られるように取り組みを進め、本市の魅力アップにつなげていきます。